

常山紀談

五

函番號	21 / 號
種別	國
種番號	32110 號
月入號	月 日

9195
338
Vol.5



常山紀談卷之五目次

一 勝頼カツヨリの首穿鑿セニサンの事

一 秀吉勝頼メツトウは滅亡メツボウを惜オシまらざる事

一 信玄タケノエの館タテ跡アトを信長タケナガ公見ミらる事

一 勝頼カツヨリ天目山テンモクサンより最後サイゴの事

一 禅僧ゼンソウ廣嚴院コウエン勝頼カツヨリの屍カバネを葬ハナムる事

一 信忠エリシ慧林寺エリンジを焼ヤカる事

一 東照宮トウショウミヤ依田信蕃ヨシノブを助けタシける事

一 武田信綱タケダノブ誅戮チュルクの事

一 戸田半右衛門トダノウヂ山口小弁コノベ佐々清藏シヨウゾウ功名コウメイの事

一 小山コノエ信茂ノブシゲ誅戮チュルクの事

馬場美濃の女召出さるる事

辻弥兵衛が事

明智光秀信長公を弑す事

秀吉備中にて光秀が書を取らる事

秀吉西國の采を買まらる事

光秀居城を築く事 附 辛崎の松が事

森蘭丸才敏の事

光秀反状が事

秀吉浮田を欺きて上洛の事

黒田孝隆思慮が事

池田家の使者筒井順慶を試る事

明智秀俊湖水を渡して坂本城小入る事

東照宮和泉國堺より御帰國が事

小寺黒田始末の事

井口兄弟武勇が事

吉田六之助首供養の事

生田木屋之介武功の事

備前國福岡城合戦福井小次郎歌を遺して討死の事

再福岡合戦茶師寺額田片岡三士討死が事

常山紀談卷之五

備前國 湯浅新兵衛元楨輯録

○勝頼天目山に落ちし時瀧川一益攻入て落人ども討せり

の首をやりし事誰といふ事をあらはし小溝の中へ棄て

し百姓も溝に少く必平伏し礼をしつゝお通といふ

かゝる事ぞと居ハラの遠れ中へ屋形の陣首れおりし

といふはくばりて首ともとりおに信忠勝頼乃首をとり

置先瀧川義大夫を呼ぶと汝がとりし首はいつまぞと問

ふ小是なりとておに此ハ土屋總藏昌惟が首なり伊東

伊右衛門といふ者よりみ出て勝頼の首をえて此こそ伊右衛

門が取しとておに此ハいつまぞと問ふと軒口小乗し馬の栗

毛かき毛の血をさぐりつれて天目山の麓田野より鞍乃
四方出づ付し故ありとやん果して初より守らばよりて伊東
がらりし小定よめ信長勝頼の首を見ていくは汝が父非義
不道ありし天の譴のぞれぐしく今かくなりぬ信玄一度京
よ赴んと志しとて汝が首を京にたくり女童小見志ら
まよと罵り首なし東照宮に侍りしやうはぐりしれり東照
宮侍将机よおしりしやうはぐりし勝頼の首と写し召将机をおりさ
せむひ偏しとてたゆむ思慮なくかくなりせむと礼義い
く仰あり是を侍りて関甲斐信濃の士ども徳川家よ心をよせ
奉るかりたるまこと

又一説は勝頼の首を龍川が士瀧川莊左衛門とりの使番小

持せて信長よ見せしをさぐりつれて罵りて杖よて二つと
て後足あて蹴られたり莊左衛門是を見てかき本とてたけ
まじ織田家の運命とやあはれてかんとつひくると蜂須賀阿
波守至鎮六長臣稲田修理が弟丹波滝川が方よ信長より
置まきしとてさぐりしとてはななく信長弑せられしとて

莊左衛門心あき者よとて蜂須賀の家よと捜求りしとて瀧
川此家滅てはかれ居きとて召出しとて仕へりとなり

○信長甲州よ攻入し比秀吉と筑前守とて西國毛利家よ
向て甲州の軍よ後に勝頼死して甲州平均なりしつとて
秀吉大息はつていし人を殺しきとてこれ残りしとて我
軍中よ有るはあひく諫やて勝頼よ甲信二州をあえ

て関東先陣と云々云々東國ハ平らぐ

かたし悔まじり

○勝頼亡て後信長信玄の館をらんとして馬を乗入んとせしめ

しし馬進まじりしハ引延されたり 東照宮ハ程徑く

甲州を治えさせし時信玄の館ハ跡清後の時彼門外

して馬下り下させし多し

○勝頼滅亡天目山よそのるを甲陽軍鑑ハ切死し没せし

よりのせきり甲州此士民のいひ傳ふハ異なり鶴瀬も

信頼と背りバ天目山坂下して落ゆれし一揆所より

起りしは百姓のあつて従ひし婦人ともいひし旁此人

家へ其れをいひしとばししとせし出入り口をぬきし火をい

られり小高に所より上を武田の家代々持傳へらる

楯毎と之る物の具を信勝と替せしめし土屋總藏肩入

役を志しりして勝頼薙刀を横へし一揆に向はれ

しを總藏屋形ハ新羅三郎より二十八代弓箭の家を

とせしし今ハ此ハ及むせし一揆しし序首を

守りし人事口惜くいと諒られバ衣なりして物此具を

總藏ハ錯せしめて終らるしと我相従へし人々皆互

刺ちぎて勝頼此供しを總藏と僧の麟岳とあし

しるは皆事よく終るしを死して後總藏自害しけ

まは麟岳刀を口より貫き死しなりしは

甲陽軍鑑天目山のりより彈正乃筆記ハ此後此人

誤り傳へてまゝなるべし

○勝頼父子は屍田野の西北四里計中山とりの所の洞
始とく斂る人なり田野の西北四里計中山とりの所の洞
家の禪僧廣嚴院来りて勝頼夫婦信勝已下の屍を
葬る其後東照宮甲州を降を乞ふ一寺を建立有て景
徳院と號し田地を寄附あり小笠山内膳友信が弟此僧あり
を住持此僧となりきり

○勝頼亡て後武田家宗一々慧林寺に前將軍義昭公乃
使大和淡路守三井寺の上福院佐永兼禎三人かくる
所あり然れば早く出れんと信忠下知せし事二度及
づも出され信忠怒て累世の且越勝頼を少の間に境内に

とめず其遺骨をたとり斂りて詮を者をかくる
と津田次郎信治長谷川典次郎等を寺をかくる
てはがとと三人ハやく逃さりぬ僧徒比白山門の樓より
とつりて其下上燒草を積り火をかけきり快川を
始とて坐して合掌して焚死を其餘のさばりて焼
死ぐる者寶泉寺に雪峯東光寺に藍田長禪寺に高山孝見
童よびて八十人なり

又禪僧の伝へ傳へて快川濃州より一時信長招待
されども肯に今川の家より甚今川家を輔佐し
されれば信長少くせん甲州より往て慧林寺に住持
する信玄此死を深くかゝる信長愈怒てさへ

しとくすすせしれし快川の方より泄さるれば信長怒り
きえりいられしが武田の亡しを遂に焚殺はれしとあり
又其時楼下に滄先をそりてにやとてとていりしに
快川弟子の南華に法に絶あん本くらをいとも逃る
なまよあもいとも棲り飛て死にいと云いしは南華
飛きりし一群とて士卒の鎗ぶすると信しとて
者ども鎗をぬせりしは南華をすりて本を以て
後豊後月溪寺ににやとてり又ついで飛りし者
十六人有と之ども其名伝もいりや

○天正十年三月 東照宮江尻に浄軍に出され成瀬吉右衛門
正一を以て田中城をもちりけが依田右衛門佐信蕃に降参

すくえられ武田の旧臣悉背て滅亡近きありとて城を出る
と仰かすもいりし依田後ひをいり武田の長臣共の書簡
を得て虚実を定むべき旨をやり其後先年遠州二股に
城よりゆるりもいり大久保忠世に城を渡さるるとやせり
いり 東照宮をかりしとて穴山梅雪が書簡を送らせり
信蕃こゝに於て城を忍せし渡りたるは降参せば信州の本領
を以て行くべきに仰せられし依田兼光と勝頼に存亡を審し
兼らざる間ハ仰せ承りしとて信州佐久郡葦田に赴
りて既亡て伝長今度孫頼に二心あるをいりし
武名ありし者ハ諸將召かすべからばと下知し居る
者を捜し出して死罪し行人とれり 東照宮此事をいり

よせききりし信蕃を市川の陣に召まき密旨を語り主後
六人遠州飼東郡二股北奥小川とて所へかくし居せたり
かり其時仁徳よりて人らもさきすけさせりいりて

○天正十年三月武田道遠軒信綱降参し其を信忠森武藏
守長可より下知し其後されり長可各務兵庫元正を
使し武前采女を添はり信綱刀を膝下より置てをれしに
各務武藏は向て武藏ちが愛する馬の候なぐさみよんと
まりんやとてを庭に出るを元正二尺六寸あるを雲次の刀
よそ一太刀斬きりしに信綱小腰指を抽くを采女ついで
切伏しり小姓河野とて老信綱の刀を持居たりしが即抽て
采女を切兩士遂に河野をも討ちめり元正鎗を合せ首

○とて本北一こや高遠の城攻もさきより觀見て群
る中へ飛入倒まころが起あがりておろし切あひ首をとり
くろが雞尾の棒はけり物さくくつくりをさくら有るを
信忠見て難と問長可が家の士各務兵庫とゆりのたより
としバ誠し今日れ見物さといふ終しと我

○高遠の城より戸田半右衛門重政一番かけ入時赤らるる金の
尻竹の出し戸張隠のす戸衝木よりゆて通し得て尻居し倒
る其間し信忠も小姓山口小弁佐々清をふと越てかけ入
りり戸田後し人し後さくわまらるるがめた武功をさわら指
物の門木戸よりはらゆと心つくるはたあがり敵をたてか
る時外の志とならぬのありり掃きし武勇此人ハ別のり

よとつひたり半右衛門後武藏守と称し関原にて討死なり信
長後小惑状をばへりし時先小弁のまづり國久の刃を
あつて次に佐々長光此脇指をあつて汝が武功ハ誠ハ大功也
内藏助が役子あればと詞をかけらる二条にて明智信忠を攻
る時清茂小辨に向ひて死んハ屍の上此恥なるべし
とて打て出一人つて敵を斬伏其屍を引入物此具より打忘
又切ら出討死せしとなつて共十六歳容貌世を超て美し
かりきしが面ハ血を濺ぎ髪の乱まるとをみる人皆に惜みあり
且小辨ハ伏見此賤者れ子あれども美少年として呼出され
とありし人皆に惜みあり

○小山田兵衛尉信茂ハ武田累世の長臣なりしに勝頼に叛き

系して善光寺に有しを信忠堀尾茂助に下知しとくろせ
とあり則武三大夫を討手とて士一人そとく甲曹を送り一
礼せん時刺殺せし事なり三大夫善光寺に赴き甲曹を贈
りしりす由いひられ小山田歩一礼せられとも則武討た
る事ありや有て則武あつたに武田の家士大将として
数世重恩此身今度主君に叛き不義此ゆゑに討手と系し
たら向ふとつ小山田聞て口をくも計らまじくしとく
首を刎らまじくとつとも則武は動くば小山田刀をもちけ
るやうでいひとつど其時則武立あがりて首を斬きりつる
○勝頼亡て後馬場美濃氏房が女召あつるべしとて甲州の郡
代鳥井彦右衛門元忠に仰せられし尋ねるがうとつる志

まがら由をやりきり程強て其ありふ忘れさる中城に人乃
有るにバ 東照宮何くたかられぬとぞと清守あり即
る井がりのゆゑ潜し匿し盡しとすバ必ずてまた右更ら
ぬゝぬりの裁と仰せぬとぞ

○辻弥兵衛盛昌ハ天正三年の勳氣して七月甲州を去て信州
小諸に興良遠江がりとて志はび居るが猶れ亡て後徳
川家一仕へ奉ふ甲陽軍鑑に勝れ天目山に落行時辻一揆
比長とありて攻めしゆを志すを必ハ非たなり

○明智日向守光秀信長を弑せむとぞ本久一天正十年
六月朔日の夜明智左馬助秀俊を寢所によび入かへ人の
入をちりぞけ一大事乃有るなり蚊屋の中に入るといふ秀

俊頭を蚊屋の中に入り入て何事とてういといふ光秀汝が首を
得させよといふが秀俊獨て一人のこゝろをいふと問光秀三人は
命をわらひ根足ざる故なりといふ秀俊いと易さき事とてい
大事こゝろよくぬらるといふ光秀いふ事ありとてやと問ふ
幸抄に仰と日比の恨をひ合せていとて光秀の信長は
けんと思ふなり汝を偏に殺さぬとて先汝に語らんとてひ
し中々に諫争ふなり汝力を合せば志遂げこかへん従へ
どハ汝を斬んとてひしとて皿を先秀俊先臣一人に語り
ききふたうに諫中をいふとてや外小も語りし人ハ駟と
不及とやするれは泄すそを臍をかむとも益たうとてお立ち
とて夜半計し俄に軍兵を起し一歩めれば二日其曙し

信長の宿せしれ本能寺をとりかへし森蘭丸長定は
事を物ささぐりて白たかびり上は浅黄かれ子の
小袖をささり立出て見ると壁の外は水色乃旗尺ゆる信長
敵ハ誰と向ふに蘭丸明智とていとヤシももてぬ箕浦大
藏古川九兵衛天野源右衛門等大庭よもい入信長白さひ
と物を着弓持て射らまじ小弦をうり地臘脂のかびら
とて北七八歳計の女房十文字此鎗を拵来アを信長
わつとり志をり防まじ内よつと入て障子をひき立てれど
も燭臺のいさぶみ火は信長にかけりたりをみて
天聖鎗をとりぬ刺通に蘭丸第九十七歳力九十六歳
なりしが切て出付死しる際内より火をかけ灰然とな

アッアッアッ

○明智信長を弑す時秀吉ハ備中よ毛利家小向て陣せし
が秀吉所々志のびれ者を置まじ小備中庭瀬よて怪し
げある飛脚の者生送りきり秀吉其書を披たんとり
信長を討とらば秀吉必敗小まじり秀吉土口を追撃せし
毛利家へい送るまありし此書毛利家よわびいふあ
る謀はるるも志をばりて秀吉の慮浅くどと人のを
又高松此城ハ忠やまじ攻落とべらよ水攻めして日を
経るハ信長常は大功の速に成を思ぬと心の心けは
察しこれなるといへし
○秀吉備中よ陣して毛利と和平せん事を計り密よもて

○を運ン西國サイコクの米コメを價アヒを貴タカく買カハまうーバ城米ギヤクメをホして賣ウる者オホ多コ小早川隆景一人固く制セイしてうらせば信長弒シせらまさく秀吉と毛利家モウリをホれあぶりしし兵糧ヒヤウラウ乃ハゆこらたるゆ故終コエツヒと和平ワヘイと及オホべりり

○明智江州坂本アケムゴウサカモトの城シロを築キツく時三浦サンホとり者キ

彼カるゆりかさひけきやまの路

光秀ミツヒデとりたよ

磯山イソヤマはくえんとくる松村

又光秀丹波龜山タニハカメヤマより愛宕アタゴはくる山の郭カクをかまし此山を周山シヤウサンと名ナく自ら武王ブウ比ヒ信長シナナガを殷インに紂王チウワウとたとる心後ココノチはくれくりと人ヒひりり又志賀唐崎シカカラサキ乃ハ松マツの川比

比ヒより枯カレりし松光秀植ウエつぎとて今イマは松マツあり光秀ミツヒデよ先の歌ウタ

これあらうて誰タレハう急イむひりら松マツらうりしくあけ

志賀シカは浦ウラの方

一説イツセツ青蓮院宮尊朝シヤレンインキミノノ法親王ホウシンワウ比ヒ平崎ヘイサキの松マツ比ヒ記キとて見ミれ

どハ大津オホツツの城主シヤウシユ新庄ニニシヤウ駿河守シマノリ直頼チヨクヨリ舎弟シヤテイ松菴マツウツ東玉トウギ雜齋ザサイ

直壽チヨウジュ此雜齋ザサイ天正十九年卯テンテイジウニユウの秋アキ植ウエられし由ユ其時シのうみ

おのつらう子代ヨも経ぬへ辛シ崎サキ比ヒまりしひの路

みそたなりせら

比ヒまり今イマの松マツハ此新庄ニニシヤウの植ウエらまりしり

○森蘭丸モリランマルハ三左衛門サンサエモン可成ヨシナリが子コとて信長シナナガ寵愛チウアイ厚アツ一ト十六歳ジュウロクサイと

○五万石の地を^{カキ}つゝ^{カキ}入らるるある時^{カキ}刀を^{カキ}りて^{カキ}置^{カキ}ま^{カキ}りて^{カキ}刻^{カキ}削^{カキ}る
数^{カキ}を^{カキ}か^{カキ}ぞ^{カキ}く^{カキ}居^{カキ}り^{カキ}後^{カキ}は^{カキ}信^{カキ}長^{カキ}か^{カキ}く^{カキ}の^{カキ}人^{カキ}を^{カキ}つ^{カキ}る^{カキ}免^{カキ}刻^{カキ}が^{カキ}や^{カキ}の^{カキ}数^{カキ}
い^{カキ}ひ^{カキ}あ^{カキ}て^{カキ}あ^{カキ}ん^{カキ}者^{カキ}も^{カキ}此^{カキ}刀^{カキ}を^{カキ}あ^{カキ}ら^{カキ}ふ^{カキ}な^{カキ}き^{カキ}由^{カキ}い^{カキ}ま^{カキ}れ^{カキ}る^{カキ}ま^{カキ}じ^{カキ}バ^{カキ}皆^{カキ}お^{カキ}り
料^{カキ}て^{カキ}い^{カキ}ひ^{カキ}々^{カキ}る^{カキ}ふ^{カキ}森^{カキ}と^{カキ}さ^{カキ}た^{カキ}る^{カキ}数^{カキ}へ^{カキ}く^{カキ}覚^{カキ}え^{カキ}る^{カキ}り^{カキ}と^{カキ}て^{カキ}い^{カキ}ひ^{カキ}信
長^{カキ}其^{カキ}刀^{カキ}を^{カキ}森^{カキ}に^{カキ}つ^{カキ}ら^{カキ}せ^{カキ}ら^{カキ}り^{カキ}信^{カキ}長^{カキ}森^{カキ}が^{カキ}明^{カキ}敏^{カキ}を^{カキ}試^{カキ}ら^{カキ}る^{カキ}り
多^{カキ}う^{カキ}り^{カキ}ま^{カキ}れ^{カキ}ども^{カキ}一^{カキ}度^{カキ}も^{カキ}い^{カキ}ち^{カキ}や^{カキ}ち^{カキ}れ^{カキ}く^{カキ}其^{カキ}才^{カキ}老^{カキ}年^{カキ}此^{カキ}人^{カキ}も^{カキ}及^{カキ}ぶ
な^{カキ}ら^{カキ}ぬ^{カキ}非^{カキ}に^{カキ}明^{カキ}智^{カキ}が^{カキ}恨^{カキ}あ^{カキ}る^{カキ}事^{カキ}を^{カキ}あ^{カキ}ら^{カキ}ず^{カキ}潜^{カキ}り^{カキ}信^{カキ}長^{カキ}の^{カキ}前^{カキ}に^{カキ}出^{カキ}て
光^{カキ}秀^{カキ}飯^{カキ}を^{カキ}く^{カキ}ひ^{カキ}た^{カキ}が^{カキ}う^{カキ}深^{カキ}く^{カキ}思^{カキ}慮^{カキ}す^{カキ}る^{カキ}体^{カキ}に^{カキ}そ^{カキ}箸^{カキ}を^{カキ}と^{カキ}り^{カキ}居^{カキ}し
や^{カキ}く^{カキ}有^{カキ}て^{カキ}お^{カキ}も^{カキ}り^{カキ}是^{カキ}に^{カキ}ほ^{カキ}ど^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}入^{カキ}る^{カキ}事^{カキ}別^{カキ}乃^{カキ}子^{カキ}細^{カキ}ハ^{カキ}よ^{カキ}も^{カキ}い^{カキ}ひ^{カキ}
恨^{カキ}奉^{カキ}る^{カキ}る^{カキ}志^{カキ}が^{カキ}く^{カキ}な^{カキ}れ^{カキ}バ^{カキ}大^{カキ}事^{カキ}を^{カキ}ま^{カキ}り^{カキ}て^{カキ}い^{カキ}ち^{カキ}あ^{カキ}ら^{カキ}ん^{カキ}刺^{カキ}殺^{カキ}さ^{カキ}べ^{カキ}と
い^{カキ}ひ^{カキ}々^{カキ}も^{カキ}を^{カキ}信^{カキ}長^{カキ}の^{カキ}也^{カキ}と^{カキ}し^{カキ}佐^{カキ}和^{カキ}山^{カキ}を^{カキ}バ^{カキ}終^{カキ}に^{カキ}汝^{カキ}に^{カキ}つ^{カキ}ら^{カキ}せ^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}は^{カキ}

たま^{カキ}き^{カキ}り^{カキ}り^{カキ}此^{カキ}ハ^{カキ}森^{カキ}と^{カキ}ま^{カキ}り^{カキ}先^{カキ}に^{カキ}父^{カキ}が^{カキ}付^{カキ}死^{カキ}の^{カキ}跡^{カキ}に^{カキ}く^{カキ}い^{カキ}ハ^{カキ}坂^{カキ}本^{カキ}を
驟^{カキ}ま^{カキ}と^{カキ}や^{カキ}ら^{カキ}ず^{カキ}明^{カキ}智^{カキ}に^{カキ}興^{カキ}へ^{カキ}られ^{カキ}り^{カキ}バ^{カキ}謔^{カキ}言^{カキ}す^{カキ}と^{カキ}い^{カキ}ひ^{カキ}信^{カキ}せ
られ^{カキ}ど^{カキ}果^{カキ}して^{カキ}弑^{カキ}せ^{カキ}られた

○光^{カキ}秀^{カキ}天^{カキ}正^{カキ}七^{カキ}年^{カキ}六^{カキ}月^{カキ}修^{カキ}験^{カキ}者^{カキ}を^{カキ}遣^{カキ}り^{カキ}て^{カキ}丹^{カキ}波^{カキ}の^{カキ}守^{カキ}護^{カキ}波^{カキ}多^{カキ}野^{カキ}右^{カキ}衛^{カキ}
門^{カキ}大^{カキ}夫^{カキ}秀^{カキ}治^{カキ}が^{カキ}り^{カキ}や^{カキ}ら^{カキ}る^{カキ}光^{カキ}秀^{カキ}が^{カキ}母^{カキ}を^{カキ}質^{カキ}し^{カキ}て^{カキ}出^{カキ}し^{カキ}て^{カキ}ば^{カキ}り^{カキ}り^{カキ}れ^{カキ}バ
秀^{カキ}治^{カキ}其^{カキ}弟^{カキ}遠^{カキ}江^{カキ}守^{カキ}秀^{カキ}尚^{カキ}共^{カキ}に^{カキ}本^{カキ}目^{カキ}比^{カキ}城^{カキ}に^{カキ}来^{カキ}り^{カキ}て^{カキ}酒^{カキ}も
あ^{カキ}ら^{カキ}ず^{カキ}て^{カキ}り^{カキ}て^{カキ}た^{カキ}ら^{カキ}ず^{カキ}一^{カキ}兵^{カキ}を^{カキ}伏^{カキ}お^{カキ}き^{カキ}て^{カキ}兄^{カキ}弟^{カキ}を^{カキ}始^{カキ}徒^{カキ}者^{カキ}十^{カキ}一^{カキ}人^{カキ}を^{カキ}生
どり^{カキ}安^{カキ}土^{カキ}不^{カキ}佐^{カキ}ら^{カキ}ハ^{カキ}り^{カキ}秀^{カキ}治^{カキ}ハ^{カキ}伏^{カキ}兵^{カキ}と^{カキ}あ^{カキ}ら^{カキ}る^{カキ}戦^{カキ}ひ^{カキ}り^{カキ}時
傷^{カキ}を^{カキ}蒙^{カキ}り^{カキ}途^{カキ}中^{カキ}に^{カキ}て^{カキ}死^{カキ}に^{カキ}信^{カキ}長^{カキ}秀^{カキ}尚^{カキ}以^{カキ}下^{カキ}於^{カキ}安^{カキ}土^{カキ}に^{カキ}て^{カキ}磔^{カキ}し^{カキ}せ
られ^{カキ}り^{カキ}丹^{カキ}波^{カキ}に^{カキ}残^{カキ}り^{カキ}居^{カキ}る^{カキ}者^{カキ}ども^{カキ}明^{カキ}智^{カキ}が^{カキ}母^{カキ}を^{カキ}磔^{カキ}し^{カキ}り^{カキ}り
明^{カキ}智^{カキ}遂^{カキ}に^{カキ}赤^{カキ}井^{カキ}等^{カキ}を^{カキ}攻^{カキ}め^{カキ}り^{カキ}丹^{カキ}波^{カキ}を^{カキ}信^{カキ}長^{カキ}に^{カキ}つ^{カキ}り^{カキ}賜^{カキ}は^{カキ}り^{カキ}り^{カキ}と^{カキ}

又信長あつ時酒宴して七盃入れさくらびをりて光秀もさひ
ららしく光秀さひもよろしくと辞しやせバ信長脇指に抽此白
をのせむべらう酒をねむだたらと怒らまうらバ酒のこてりり
其後稲葉伊豫守忠人を明智多くら此禄をいらくよび出勢
しを稲葉求までもりどは信長りせと下知せられ
をも肯り信長怒て明智が髪を挿しひきふせてせめらる
光秀國を賜ふへども身の為は政まことなく士を養ふを
一とす中答くまバ信長怒たぐらさてやまらり 東照
宮御上京北時光秀は池走の本を命きく種々饗礼の設
くく信長鷹野の時卒より死て肉は臭く草鞋ゆく
ふみちられり光秀又新用急しる処は備中へ出陣せよ

と下知せられらバ光秀忍て叛りといたりはまは信長の
暴ちりり論を述べ光秀土地を畧せん為は老母を質小
してこらりぬる不孝を信長の賞せられぬる忍れ共悪逆は
相あへ終を令せざるこそ理あり

○光秀信長を弑す時秀吉備中より引退する以時備前乃浮
田八郎秀家幼少なれども長臣老将の面々いふたふ謀らるや料
アゴいられバ先使を岡山北城よりやりく一刻もこく池上り吊
軍を志し岡山よてお謀らる云せられら浮田ハカより光
秀工心を通トクまバ秀吉の帰路をふたぐらやいせん
といふまふかく告来まバさバ城中少て討とる願ふ処の
幸なりといひらるに悦らつて其謀を相議し秀吉六月七

日比明ぐよ高松より引返す午の刻むくろ宮内よきてやぐて
岡山よ赴くどぐといひぬくくく俄に霍乱しころとくうら
しきまバ秀家の使来すくふ近習の者た出きて只今霍乱
て吐瀉せしが腹は痛少くやめて寝入りとあへきひて時を移し其
間よ秀吉ハ奥州驛といふ名馬よ乗雑卒よすどり吉井川をわ
せりり片上をる宇根よ弛つけられバ馬はうれりけて使を岡
山よやりて急ぐ事のはてり記道を通すてふぬといせけれ
しうバ浮田れ人よ皆あきまきくかといせ

○秀吉信長の吊合戦せんとして備中より引返されし時姫路よ立
しうくばしと人もあひりくふ黒田孝隆姫路よ馬を駐らるべ
き平少の間も然るどくべいかりそめれ旅も家出ら遅々

とく人情あり今度ハ主君の仇敵討べき為の軍しうく
大和乃筒井細川を始め明智がとくみりる者ども弛加し
あバゆしと大事なりいりやせんと思慮れいよと決せざ
る中にいそだておしつをらまきと謀りてりけれバよくこそ
いひしこととて一人も姫路へよりたらん者なきバ忽誅すべし
とあれさせられり孝隆先達て人を走らるし姫路の町人も
河原へ出粥を志すくし軍兵よあてなれどと下知し
きりりけれバ食着を河原へ持出しりりきまきと立よりて山
崎表へけり付くまきと太閤記よ姫路よ二日滞留といへる
ハ誤なり

○光秀信長を弑せし時筒井順慶ハ光秀とまきりて必典

せりたる人と人々をとり池田紀伊守其臣日置猪右衛門
土倉四郎兵衛丹羽山城三人を使とて順慶のりくやら
をくく三人兼て順慶の明智とてせざ刺殺せざるとや
紀州公いやとよ汝等死せば片手を折まてくく同どと
制せくくくくバ三人かきめて順慶と軍せんといくくのみ
おひ討死くべさゆバ三人も討死とてきよては三人をめて
多く此味方よかき戸へ順慶をうちとくは光秀必敗小臣
ぞとて順慶がゆきゆく順慶出あひくといくく光秀
が不義くくみさだ紀とく信長此吊軍せんといくくも偽
ちくめ体なれば三人悦て帰るきよて山城今日順慶いふとい
んり刺殺さんと思ひく坐中をきくとてきよていふといくく十

六七歳むりある男此順慶が刀持て居たりとてくく
只者たるべ順慶の飛くくくバ頭二つ切りつてく
見えりと強りければ日置も土倉もされバ我オもささひつ
事よといひたりか此小姓ハ牧野兵太とて武者修行して
世よとて剛の者となりく

○光秀信長を弑して安土の城を攻めくく左馬助秀俊とて
せく山崎にお向ひ秀吉と戦て敗北せり秀俊安土を出て光
秀を救んと京をたしてきよて光秀討まてくくと
くくバ坂本の城に入んと粟津を北へ大津をくくしては
秀吉此先陣堀久太郎秀政とてあひたり秀俊小勢あられ
うら破らまきぬかきハ敵とてあきぐれつ湖水と馬をくく入れ

およぐをうれば秀吉の軍兵ども汀に並居て溺まんるを
見よと笑ひたり秀俊ハ白練の雲龍を狩野永徳よりせ
し羽織を着二此谷といふ曹を忌大鹿毛と名づけし馬
に乗年久しく坂本に有て大津より唐崎までの遠浅ハよく
走りしをきやすく唐崎をばり乗らげひら松の下よく
馬ハ息あひれ茶を飼退くる敵を見て居しり又馬
乗坂本に入時十王堂の前よく馬よきあり手綱をりて
堂に繫だ矢立此硯より出明智左馬助湖水をわせば
馬たりと札しきりかき結つけ坂本此城より光
秀の妻子と天守より安土より光秀が奪り来まると不
動國行二字國後の刀茶研藤口郎の小脇差たる柴の肩

衝し流石の釜をとり名物の器を唐織の肩衣に包そ
天守より投おろし其後女童を刺殺し火をかけて自害せ
し二の谷此曹ハ羽織と黄金百両添て坂本此西教寺に送る
をりほし山中山城守長俊が孫作右衛門友俊曹をのぞみ
乞て得しりしは経路て紀伊の士宇佐美造酒助孝定が許し
傳りぬ羽折ハ方をもり馬ハ毎双の駿足し秀吉志津
嶽の軍に此馬に乗まじりたり

○信長弒せし時 東照宮ハ泉州堺におくしりし小勢

とくくしりを失へり 東照宮素より地理をきりしめされ
河州飯森のよハ要害地なれば其地をもちて軍のしんと仰

ありて、森口ニ居せし時本多忠勝京都ニ侍使しあり
くろがそとて變をも引返して来て敵大勢よていらんやう
片歸國ゆるとんと申を聞し召案内者ハいゝすだ
敵道を要らんハ必定なりやと討まんハ口をくく
と仰るる處小信長より馳走しはらまらる長谷川竹
丸當國の交地於津田乃らり信長の恩を蒙る者
此らちこいへばさあさあといふと申津越をゆるて山
城の相樂郡を過木津川をわたりそれより宇治橋の上
一里計東の瀬を涉り江州信樂し出るまより伊賀北上野
鹿伏兔越を伊勢比白子よむて船よ召まらるゆると定
られと忠勝蜻蛉斬と名づけし鎗を掲げ其邊の百姓を

お具し此殿の案内せしといひくそれより道く此村くゆく
かくもさうりくれバ津田より案内者来りぬ其日ら山城お
樂郡山田村よとあせまひ所より心をよせし人くども
あやうく警衛しなる穴山梅雪とこれやで後ひなりしが
ひさふらまらり

宇治より木幡越を江州高島し至り濃州し赴き甲州
しゆるべき旨をきてひさ別まらる一揆の爲し山城此綴
喜郡よて殺されたり

其翌日本津川よむせきりし柴船二艘らりたれから
んとりし肯されバあらい奴ら切て棄んとりし恐まて
のせ奉るやがて涉りをりせまひく二艘の船皆打りて

棄^テり其^{ソノ}けの日^{イツキ}一揆^{イツキ}石原村^{イシハラ}ありて待^マけり大^{ダイ}
和^トより後^{シタガヒ}ひきり吉川^{ヨシカハ}善兵衛^{ゼンベエ}其^ノ子^コ主馬^{シメマ}助^{タケ}柏^{カハ}の木^キを馬^{ウマ}志^シ
しめり先^{サキ}がけし追^{オウ}ちり柏^{カハ}を家の^{イヘ}紋^{モン}にせよと仰^{オウ}せ
り宇治^{ウヂ}田^タ系^{ケイ}の地^チ士^シ山口^{ヤマケチ}玄蕃^{ゲンパン}清膳^{セイゼン}を献^{ケン}じ
て宇治^{ウヂ}川^{カハ}よりせり船^{フネ}なり柳^{ヤナギ}系^{ケイ}が士^シ原^{ハラ}田^タ佐^サ吉^{キチ}忠^チ次^ジ
船^{フネ}一艘^{イツブネ}をちがし
て渡^{ワタ}りし雑^{ザツ}卒^{ソツ}より皆^{ミナ}こころを得^エり江^{ゴウ}州^{シュウ}
信^シ樂^{ラク}まで八^{ハチ}岐^キ路^ロあり警^{ケイ}衛^{エイ}より後^{シタガヒ}へり人^{オホ}多く一^{イツキ}揆^{イツキ}
とさしりもたう多^タ羅^ラ尾^ビ四^シ郎^{ロウ}光^{ミツ}敏^{トシ}ハ世^ヨ々^カ信^シ樂^{ラク}を領^{レウ}し
り其^ノ子^コ長^{チヤウ}兵^{ヘイ}衛^{エイ}清^{セイ}迎^{エイ}よりあり人^{オホ}心^{シン}をうらがり人^{オホ}々^カ
恐^{オウ}ろし忠^{チウ}勝^{カウ}より光^{ミツ}敏^{トシ}清^{セイ}敵^{テキ}するも彼^カが家^{イヘ}に入^{イラ}せ

まきりしものぐりも一^{イツ}向^{キョウ}入^{ニル}せ給^{タマ}へと申^{マウ}せバ皆^{ミナ}むあり
として立^{タチ}ようせりし時^{トキ}りてなりを設^セけ人^{オホ}々^カを忘^{ワス}れし
又^{マタ}忠^{チウ}勝^{カウ}此^{コノ}多^タ羅^ラ尾^ビ二^ニ心^{シン}有^{アリ}と又^{マタ}バこころに刺^{サシ}殺^{コロ}せり
としひるるお立^{タチ}ようせりし時^{トキ}りてなり
五日^{イツニチ}は高^{タカ}見^{ミン}嶺^{ミネ}を打^{ウチ}越^{コエ}たり伊^イ賀^カの案^{アン}内^{ナイ}
成^{ナリ}いし伊^イ州^{シュウ}はまの^{マノ}人^{オホ}も忠^{チウ}勝^{カウ}下^ゲ知^チりて伊^イ賀^カの案^{アン}内^{ナイ}
者^{シヤ}志^シりたり國^{クニ}士^シありて警^{ケイ}衛^{エイ}より上^{カミ}拓^{タク}植^シ
りり三^{サン}里^リ半^{ハン}計^{ケイ}鹿^カ伏^{フツ}兔^ト越^{コエ}り深山^{シンサン}を越^{コエ}り六^{ロク}日^{ニチ}
小白^{シロコ}子の浦^{ウラ}より尾^ビを越^{コエ}り竹^{タケ}丸^{マル}秀^{ヒデカガ}一^{イツ}後^{コト}藤^{フジ}を始^{ハジ}め
りて和^ワ州^{シュウ}山^{サン}州^{シュウ}伊^イ州^{シュウ}の士^シより清^{セイ}暇^{ヘマ}より戸^ドりり時^{トキ}をたて濱^{ハマ}松^{マツ}
系^{ケイ}るべきなり懇^{オン}し仰^{オウ}を蒙^{カウ}りり三^{サン}河^{カハ}より

たぐく帰らせきまゝひぬ伊賀ハ去年九月信雄攻入て打奪
ぐられし比逸かゞゞ者を求む殺害を専とせし作
らば國士ども三河よ系て侍恩を慕ひて人々多かり
らば其從類皆警固しなりたるとなりやがて明智を追討
此為侍軍を出されし伊賀の國士どもはつかりはひて
参りて多かり大番入しせむ恩賞ありありと
○黒田美濃守職隆後宗圓と備前國福岡此人なりしが播
磨の小寺藤兵衛政職仕て子官兵衛孝隆後如水と稱し共小
功名ありて用られり播州ハ其比所より人々地を據りて
守り軍せしが小寺ハ五著有て姫路ハ小城をかまへ黒
田父子は有て秀吉ふたのこく信長の旗下に屬し孝

隆の子長政其比ハ松千代といひしを人質ありて秀吉此
居城近江の長濱に置り此比毛利家ハ兵勢強かりて
小寺約を變せんといひ孝隆ハ然るるる信長物あ
らき人たれども一旦天下に旗を揚げらまへば未だ
先時の宜しきに隨ふべし松千代は棄てて悲しくか
きし非ざるといひ免きり小寺岡入に孝隆父宗圓小父
子とも誅せられぬべし密謀を告宗因物たつまつり士五
六人呼らひめ所存を問ひ官兵衛五著ふるらるるハ危
かゞゞといふ孝隆はれバ諫ハたれども事も見えて
て姫路小寺てこもらんハ君ハ弓をひく非ざりや五著小
赴きて力を盡し奉公かなはびて自害せん其後人々

心を合せ父此序事きのみまかきし由決断せしむる一クバ
人々父子おし隔られむハいづいへき只病とて五著の奴原
は使をめて媚諂ひ欺くは志くば付み来らざ力
たり其後一戦を遂て五著を打破るなり罪ありて討ん
とす悪逆此人天の咎なりんやと口々いへども孝隆
各存じむ昔ハ欲しとてこのりあきども今病といも人ノ実
しハ安入ド必主君ノ叛くと人ノ誅られん士ノ志ハ此に
君小保くちひ入き忠の心くたらんハ運れきハ先
ちまバ力なりし一人誅せしむるなりともいふおせん
此姫路をば取まて天下の安危歲月を担ぎて定
るべしそぞある色れ見えれば宗圓家の恥を思ひ

て身をしてひととひ定る事士の志なりとて五著小のたて
事かありすバ自殺せよとれ本ハ心安くちひへ君の志を
ぐりもわき叛くべしとひしは孝隆打つてひきさ
バとく座を立たん人々只今ぞ召きつれての仰ら遺言よ
あはれやり五著こそ難をのぐまき戸をばハ其の時人
五著の城を枕せんと誓ひたり宗圓官兵衛ハ安兵衛杖
せよ人々ハ人の志をせよと下知せられんバ孝隆五著小赴
く宗圓又ねくり子たりども取つた本なり先づらべた
親の留まり子ノ死福といつて口をくちゆれども君
恩浅くしむるハ人れ存るまたり今讒言を信せしむるハ
そ懸りしき孝隆をやらざりて引り謀叛しと命ハ

をうた物ぞとさあるハ父の道ハ非ど仇とたりて身と殺
と恥を志ささたりたりとてさめく泣くもきこぐさぞ
五著こそきこりてん今姫路小弓をひく設たる酒
かりして時舞うて日をおもひいひとて孝隆ハ
五著小弓と心おくはた人のゆふ使とて求め来まは
者ありとて食とめやうに語とて打とけとて体たれど
いらははくろあも心の外はうれぬ幸ハあらうとたど
いひあへり又此を救く黒田父子ハ謀きくまらた者あてよ
き士らまう有城ふりて用意せん間小官兵衛を以て欺く
はたも計くとして姫路の橋をすゝ宗圓金剛と森ま
せく打とけとて体たれどは別事もあるじとらへ

以時攝州荒木摂津守村重ハ毛利ハ属一信長と戦ひ利
らして有岡の城ハひまこりて此由小寺聞て孝隆もよ
びとこれ毛利とてささたハ内々荒木といひかたりて
故たり今毛利あまたるハこが過たりとてさめりて
はまごども此やうしてまぎれをせんハ表裏者といれんも
口をくくさバ中々有岡のゆりて荒木を誅くり関入ど
秀吉ハ謀とて信長と荒木和平をとり行ふなり攝州
信長ハ従とられも真ハ心をひくぐりて信長ハ従ふべ
といは孝隆やて信長と荒木と和平ハ思ひよりもひり
荒木なく信長ハ背きまはまバいうで其言を信せらるべ
参りてりもいづ事たりん然ども辞とてセバ勇か

たに似きりとして有岡一赴く路難路立よりて父子對面
有岡小五郎ハ必首ををぬべしと云うおさえて囚とせしむる二つの
中より一は五著の死より有岡一赴て死ハ信長も又世
のかされともありいべしと云ひ切しる色を宗因見て涙しむ
せむしむる物をもいとざりしがやゝもて誠小困厄の至極か
まして名よかくて子をすらすハ義をぞふたなるとして又送
ア一バ孝隆有岡一赴きり小寺兼て村重小密一毛利
小一味とぞさふ黒田父子人質の松千代を信長一出一置
きれハか此父子ハ織田一内通此志にやと告あせしむるハ
有岡の本丸よよび入生ごりて牢よおしとみしより五著一此
由御さ一は小寺つとむりく齒かきとち荒木が狼籍

の次第遺恨深し然れども此上ハ信長小一味乃くを易
く毛利一興一官兵衛を引くる謀や有べたといふ一は宗
圓怒く皮を衛生ごり一成一バ是非の論たり一年をくらふ
身れ子を失ひい本ハ誠一力あら次子たり然る一皮兵衛を
とくしんすいそれたれし船もども先松千代誠信長一出ハ
事ハ君も又臣父子と相計まらぬ如てい今度官兵衛を有
岡一赴て捕へしハ若木一様さほのふまひたりわたりれる
交の入りちちを棄てくおしとめし者をきすくぞとハ逆あら
びや只順道小隨て天此冥見を待しとらばこれわたり対し
度々の軍小隨と小寺は家の危難を救ひ今齡かつてたれ
え切し長子松すてい本ハ口をくくへとも首とつと

とも毛利一昨せよとの仰をハ得兼らどとて刀を抽き誓く
とまじバ使も言たうくて歸り宗圓が士ども五番を攻破らん
とつども用ひば村重心あつたつていへり五番を攻むバ村
重も官兵衛を殺害せよとあつたつていへり五番を攻むバ村
と思て官兵衛が女房をバ潜小此比引り置りてつてつて
村重ハ小寺小守のされく孝隆を生りたつていへり巴が
中も非まばいともあつたつていへり信長有園を攻ふ及び
毛利家の後巻もせされバ城落りりりり孝隆ハ牢中
つて有つたつていへり栗山備後善助時々有岡よ由りて
く商家をかから牢の校比沼より姫路の事どもか
ま夜くして案内をあらつたつていへり牢中まらつて
見まバ番人

落しせきり此ハと驚た且悦て善助すてあつたつて
破り引きてつてつて三年居がみ其上に濕瘡を病く起す
つていへり牢中の人をせつたつていへり城を出
寄手の陣よりつてつて姫路小歸る事を得り秀吉播州小
攻入る及て小寺ハ但馬より田父子危難を脱るるを
得く孝隆に宗栗郡を賜り姫路を秀吉の城と成後如水
と称して智謀をくつて秀吉に功臣第一と聞えり
これ孝隆なり

○黒田孝隆播州にて秀吉の命を復長比坪といふ城を攻落し
井口猪之介三宅藤十郎も其城を預け孝隆ハ秀吉の先
陣して慶小其城より逃落る者ども一族を催し其夜攻よ

せしめり井口三宅人もかく攻破せしむる普請もいさむせしむる
守りて殿いさむ遠くハゆりせざるハド切めけてさめり
後巻の事ハはべりと云合せ三宅ハ百二十人計にて搦手有
し人数を残り二十人計を連圍をゆる敵利をたたく攻入せ
り井口ハ大手少く防戦しが翌朝辰の刻後巻の旗先見え
元薙刀少く片股をたぐり落され石垣もきり居し事ども
敵恐まじく近付きて最後ハ大喜あげ此城乃大将井口猪之介
ぞ看されとく自害しきり孫十郎ハ後三宅若狭とて武名
あり猪之介ハ三人の弟に六大夫甚十郎典一之助といふ六
大夫ハ播州北条北構をもちり討死しり時孝隆此士
罪ありて討手を向らふに却て討つを切く兄弟三人町に出

大あつ屋よなるりり甚十郎見て系んとつとも孝隆
あつされざるふ再三及くれバはくゆりされり
甚十郎其処ゆくと忽門の潜戸をひき放し楯小りて
飛りて戸を以て二人を打伏せ一人ハ切殺し打倒し
二人も切く首三つとりて馬に乗二町計帰る処罪科人の
従者主人此首を見て鎗少く甚十郎が馬上を目がけ飛
かりて突はられたる其着を切てさくされとも痛手
して馬より落少時ありて蘊生しを戸板のセま
孝隆膝を枕しはせるハ如何と向るハ如此といと一言い
ひて終まり兄弟三人皆死し事報りて河
なりて孝隆其父典二右衛門が宅に自往く吊りて一葉ハ

之助七八歳なるを呼出さる既九つはぬる比三人の兄は
勇氣よく一と者ありけれども人の生質ハ計がごとければ試
んと思ひく磔を足つてやと向うに足ばと答ふ今夜は月明
ありその所の所此磔木の下にゆきさきしを立ちゆんやとい
ふるに兼ひとて自沖幣込切に竹につけくわくへらさる
典一拵はく立んとすふ磔木動くを見て死さぬり留成
はくさくせんとして木へのぼり驚く磔木より飛下り逃
る成典一をてらふり次第なりはがすまじと追かかすせ
ん方かく宮のりり内へ入戸をきりまじりも待てるお
をさうん抱をと呼ぶさあはくさく一名をいどもぬぐれば
殿の仰よをむの為来りてせささる帷子の片袖を

證據よりとりくゆさささといふより帰るぬ朝鮮の
竹も木もあらぬ廣野の一筋のさ窪く切通し似く其
向ふ処大山乃麓りて曲尺はぬ大穴を穿ち射手を心懸
置く行かる日本人らる射殺され屍お重なり山が
の敵多少をきりざればすむ者なり井口の後者山崎喜兵
衛足てあらん馬を扣て待れぬといひすて走る心井口を
馬より下りて走り入山崎先射手三人を討ち其首を拵
大音らげく名をさる井口攻入追ちて井口を射ら
兵助といひたり此賞美し朱柄の鎗をゆされぬとす
卒尔はゆが一日小首七ツりて我朱柄ハ
とて傳へてんと人々やうゆ急事延しるが其後

井口一日の首七ツ山崎も首六ツやりのうバ朱柄を兵助の
されり晩年二村田出羽吉次と称しあり

○別所家少し首供養し人有と孝隆すて素桐若首二

十一ありし小傍むべたハ死しあり吉田六之介正利供
書はとんといまうし正利首数二十七ありてはとて辞し

きりたり孝隆小氣ちる男り今年三十一歳なり此後首
せりちりとも先供養して後し其數を合せよとて米百石

ふく之供養し播州青山の南小塚を築きしり後
此合戦朝鮮乃軍までよりし首五十小及べし後壹

岐といふ

○天正五年黒田孝隆播州佐用の城を攻る時生田木屋之介夜

中よ忍びく城際小近づきり懐中の小鋸をりて屏柱の

根を切目ぎしり翌日城攻小かれ柱小鈎繩を付く

引倒し先がけして城よ入り木屋之介り隅田小介と

日向國隅田刑部少輔が嫡子なり十六歳の時傍輩を討

て出奔し播州し行く孝隆の士井上九郎右衛門を頼まけ

る小留置し對面せし其夜隣家し人を殺し

取籠りし者あり夫をわらめ出れし付即時孝隆し

申てそれよ奉公しり攝州生田の城よて高名あり

されりり生田木屋之介と姓名をきりし是その高

名をちりり顯さん為とくや

○文明十五年十二月十二日備前福岡の戦り

備前ビゼンハリリ赤松氏アカツツクミ世々ヨ、レバ領せし嘉吉元年カキツ赤松満祐アカツツクミ
 滅亡メウバウの後備前ビゼンもバ赤松相摸守教之小賜コタメハリ教之ケノ代トシ
 官小鴨大和守備前クワンコガモ有應仁オウニンの乱ランハ後備前ビゼン津高郡ツタカノ
 金川村カナガハ王松サマシの城主松田左近將監マツダ元成モトナリを細川勝元ホシカハカツモトね
 かしらひヘイば元成兵をあらめ小鴨コガモを攻んとすコガモ
 けり赤松が家人アカツツクミちぢりチヂリ者元成モトナリくみり
 小鴨コガモを攻めぬ赤松兵部少輔政則アカツツクミ元成を賞して伊福
 の郷カウに置ぬ山名宗全ヤマナリ細川勝元共カハカツモト病死の後京都キヤウを少
 志シくあれども諸國ハ弥大キミの乱ランも松田マツダが一族イチクども備前
 西郡ニシノボリの中ウチにすし押領アサレウを政則セイノリを將軍家キヤウクニより功を賞せし
 ま播磨備前美作ハハリミを返カヘし跡アトりぬ山名右衛門督政豊ヤマナリ

こゝを怒イカり文明十二年九月京都キヤウを出イく但馬タニマの國クニ
 池下イケノるかまバ政則セイノリも播磨ハハリ池イケつク此コノついでニ備前ビゼンの
 松田マツダが恣ホシに攻アりし所トコロをあらめきざさんとせり元成モトナリ
 此由コノを多兵糧用ヒキウライウ意イの為タメ小志コシをあらめとせり元成モトナリ伊
 福フクの字ナリに於オて軍功ガンコウより賜タメハリし知チたればカヘは
 ばコトこれハ事コトに托タカしこれを打亡ウチコロシ人の謀ハカリたりん
 とて金川カナガハに城カニを構カふ此城コノを麓フモトハ大川オホカハ流ナきミ峯ミネ高く
 四方シハウ峻トシく要害ヨウガイと云イふ地チありはれども後卷ウシロキのミだク
 を謀ハサり備後ビノコノ國クニ山名俊豊ヤマナリ小告ツクて備前ビゼンを切キリとりマり
 ちトシとシひクまシバ俊豊トシトヨを悦ヨロコべり政則セイノリ備前ビゼンを
 き松田マツダがチバ地チをあらめ所トコロをあらめしシれば
 五十六

文明十五年九月山名も備後の尾道を出て回必國分
寺より三千餘をかり催し十月七日備前の國小打入り
うば松田が一族相ありより邑久郡福岡北城の西北乃山
陣中よりさりとて福岡の城ハ東西より大川流まじ中ノ嶋山
りて城上據て改則乃ち後代浦上喜三郎則國を始と
して二千餘人たて築り川上北流と長船右京亮ホム
野伏を添て陳ごりより十月廿日ねよせて合戦あり
浦上が家人より猶村与三兵衛同又四郎とて兄弟よりそ
よりあよ元成の奉公より因ありよりハ密よかこ
ひく十月廿二日夜半風くけりた便し陣屋より火をか
くよりあよ内通よ力を得くやぞ攻よせたりより城

中きびり支戦て追逐とて其後事ありはれて猶村兄弟
をかえとりこれを誅しぬ寄手其後相よりりて十月
十三日小又富岡とりよ小山よ兵をぬれ城よりも打て出ぬ
そよお戦ふあよも城兵も討く者多し

福井小次郎ハりと京都のくなりよりが四家の比父源左
當國の在番れ時連下と城中よりあよりいよるより廿二歳あり
が其日れ軍小父子の間を敵味方より隔られ父ハ城中小
入しよととひまはるり尋ふふたばれば又城外より
出と寄手よ向く福井小次郎と名乗るよてさあ校すよ
切くしりよりがしりあよ小戦ひ疲すよを家人肩小かけく
城中より引入しに浅手深手二十六所被りてれば終小死

父城へ歸りて小次郎が手箱を奪て又ふらふも
其中に母の方へ幼少よりふまきまわらせして此まふ付死せ
ば序なきはるんと我心よかりていへるごとく此世も残るも
とも終ふハ逢ふべたよといへむ思ひをりてけくなむ
よせいへともあはくしと書てわふ

生まじき親子のあはれいふちれハ何世もた備えらむ
ときこりていふりて思ひ定めしむ付死たりと人皆
をみたりと我

○文明十六年正月六日又福岡にて軍あり城兵敗小すまに
薬師寺四郎左衛門薙刀をとりて合せ爰て討死せり
よく支戦ふ同殿四郎等も命を討せり

津坂の山麓より城際まで僅の兵よく多勢を防ぎ拂
退ふも寄り寄り寄手此中ふ福屋九郎右衛門とて剛の者鉄形お
きりて曹を忌透間もあつて四郎左衛門も切てかこりに四郎
左衛門が家の士とて合せし福屋ハ付まぬはれども是を
弥むはれりば薬師寺次郎左衛門額田十郎左衛門片岡
孫左衛門三人引返り枕をたぐて切死しりたり是ハ
三人必死を約束しりて是より三人物づつありて
時次郎左衛門いひけるハ此度の軍必味方打ちくばり松
田ハかりより當國の者あり後巻を味方よりせむも播
州の加勢も来らば政則真弓峠の軍小打しけ姫路に
引退しりてすもまは味方ハ力を失ひぬさるばるも討死せり

ござ身ミゆく人の後ノチふたぎらて何ナニも本意ホンイ小あはれ重オモシて
軍イクサらハ必討死カナラシせんと語りカキたればハ兩人ニヒト聞キくキれつツも何ナニド
く存タツるコトぞト互タカヒ小何コナニド交マひテ討死ウチシせんと約束ヤクソクしケけテ今
日次郎イツジロ左衛門サエモン打出ウチデるとテ唯タラシ今敵イマテキのノもハわカるコトぞト首カビたウり
最後サイゴのノ對面タイメンとシてシてシ鏡カミ小向コカウてシつコトとシ笑ワラひシとシ出デとシ
我ワ額田タカタ八岡ヤカモト本筑後守フカモトチクゴノ小向コカウひシくコ子コよシてハ又イッ三郎サンジロハ一子コをレ
とシりシとシけてハ不便フビシにシ存タツるコトをシわカるコトとシ一イツ所ツヨにシりシばハ必死ヒツシをレ
がレおシべシるコトにシ宜ヨロしくシ計ハカひシぎラられシとシひシくシてハ必コ心得コトあり
中ナカでシりシとシらシるコトにシばハまシらシ討死ウチシをシせシらシとシなシりシ片岡カタカハ
コノ家来ケライ小向コカウとシりシ首カビ必敵ヒツテキふシとシはシるコトとシあシまシをシらシ
且シ死骸シカゲをシらシよシとシてハ小コよりシをもシてハ左ヒダリのニ此腕コノウデをシ二重フタヘ小

結ムスばシせシりシーケ果ハしくシ是コレをシらシふシ死骸シカゲをシ求モトめシ得エたり
とシや

弘化三丙午年五月

備前岡山藩中

湯浅新兵衛 編輯

發行書林

江戸日本橋通壹町目

須原屋茂兵衛

病家須知

澤善居士人著

此書初小養生の要務を説き一切の病小薬を用ひて唯常の心裁で治せし事を示し医者之駈引者病の心得食物の善悪小児の育方瘕瘵の用意懐妊の多當まで都て懇切小書惹せし有益の旨あり

養生訣

右同著

此書ハハも行ひ易き養生の方を記し人をく毎病長命のじひきり

武雜記補註

伊勢守平貞孝主著

裔孫貞丈先生註

長澤伴雄先生補

此書ハ伊勢守貞孝執事の抄録を以てて室町將軍家の儀式諸調度の来由且用ひ抄録せし書を以てて裔孫貞丈先生細注を以てて其形状を撰し書たり此度長澤伴雄先生善本を校合し

て頭書の補注を加へ刊布せしむるは武家故実要用の重宝といふべし

常山紀談

備前湯浅元植先生輯

初輯三冊 全五冊

此書ハ常山先生の隨筆にて上應仁文明より下元和寛永の比まで戦國の
將士闘争小周旋の事どもを主と記して史書を編べた料にせしむる
遺稿のまじりバ事實の正しきもの更めて亂世の光景を伺ひ觀るべき物
此昏の右小おつぱり誠小武家必用の珍書あり

雨夜燈

右同作

全一冊

此書ハ當 大將軍家御治世の初より名君良臣の言行の道不叶ひ
て有難りの事どもを輯めく治世の龜鑑とせしむる書あり
此度常山紀談刊行の序小し梓して普く世に施し

發行

書肆

江戸日本橋通二丁目	須原屋茂兵衛
同 浅草茅町二丁目	須原屋伊八
同 日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛
同 全所	小林新兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
同 本石町十軒店	英大助
同 下谷車改町	和泉屋庄治郎
京寺町通松原	勝村治右工門
備 中倉敷	太田屋六藏
大坂心齋橋通安堂寺町	秋田屋太右衛門

